論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　李 相赫

論　文　題　目

日中戦争期の文学における二重性・情動・言語
―戦争文学を中心に―

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田　祐子
委員	名古屋大学教授	中村　靖子
委員	名古屋大学准教授	日比　嘉高
委員	早稲田大学教授	五味渕　典嗣

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の概要〕

本論文は、日中戦争期の文学を対象とし、個人が「自発的」に集団の論理に包摂され、悲惨な戦争を支持する理由を解明し、ファシズムを支える熱狂的パトスが作られる様相を明らかにするものである。本論文が分析対象とする戦争文学に関する先行研究では、戦争に対して抵抗しなかった作家個人を批判するか、外部の現実と区分してその内面を評価するという、二分された評価がなされてきた。また近年では、そのような二項対立的な評価に陥ることを避け、文化状況の現実や構造といった時代的文脈の解明が進んだが、個人の内部については関心が払われないという傾向が生じた。それに対し、本論は情動論を導入することで、個人における内部と外部の関係性を問い、それによって個と集団の同化過程を緻密に抽出した。

第１部では、戦争文学に見られる二重性を捉え、そこで情動がどのように働き、どのような役割を担っているのかを分析した。日中戦争期における多くの戦争文学は二重性・両価性をあらわしており、単に一方的で典型的なプロパガンダの伝達手段であったわけではない。第１章と第２章では林芙美子の従軍記の分析を通して、戦場の聴覚体験によって喚起される情動が身体と欲望の構造にかかわって主体の自己同一性を揺るがし、揺らいだ自己同一性を回復するために、集団への同一化が欲望されるという過程を論じた。第３章では火野葦平『麦と兵隊』をとりあげ、戦場における「不安」や「恐れ」といった情動が、集団に共有された感覚として絶対化されていく過程を明らかにした。第４章では、逆に、集団の論理に従属しなかった埴谷雄高について論じた。ここでは「不快」という情動に注目し、それが感情の絶対化に繋がらないとき、自己自身を含めた時代と集団から距離を置く力となったことを指摘した。

第２部は、戦争文学における言語および表現形式について、時代的文脈との関係を考察した。第５章は石川達三の『生きてゐる兵隊』と「五人の補充将校」を通して「言葉の連鎖／対比」という表現形式が「不気味さ」の情動を喚起していることを分析し、第６章ではその表現形式が当時のモンタージュ論を導入した結果であることを指摘した。第７章では、再び火野葦平の戦争文学をとりあげ、報告文学がリアリズムの文脈において、客観と主観の総合としての「実感」を価値化したことを指摘した。最後に第８章では、対照的な事例となる埴谷雄高の言語・表現形式について、絶え間なく繰り返される想起に注目し、テクスト内の空間と時間が無化されることを論じた。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

本論文の意義は、以下の二点にまとめられる。

第一は、情動論と精神分析理論を取り入れることで、個が集団の論理に包摂されていく過程を、非意識的な領域のメカニズムの面から解明した点である。本論は、主体を先験的に固定されたものではなく、構成されてゆく動的なものとしてとらえたうえで、情動の機能を二つに分ける。情動は、一方では既存の体系を崩す解体の可能性として働き、もう一方では、社会的に意味付けされた感情へと構成されることによって既存の体系の維持をもたらす。この二種類の機能を組み合わせることで、戦争文学にみられる二重性と、個の集団への同一化の過程が解明された点は、情動に関する新しい知見の適切な把握と、独創的な適用として評価された。第１・２章の林芙美子論、第３・７章の火野葦平論、第５・６章の石川達三論など、文学テクストの特性を生かして、戦場における主体の同一性の揺らぎが、国策を受容しヘゲモニックな主体を再構成する過程を分析し得ている。

第二に、戦争文学研究において、これまで十分になされてこなかった緻密なテクスト分析を実践した点が評価された。第１部では、テクストにおけるサウンド・スケープや、二重化したジェンダー表象、また顔の描写、連鎖や対比の構成など、物語内容の水準ではなく、表現の水準で精密な分析がなされている。また第２部においては、それらの特徴を同時代の文学的文脈の中で再検討し、モンタージュ論やリアリズム論との関係が考察され、戦争文学とモダニズム文学の位相との近さが指摘された。テクストのレトリックや文体の緻密な分析は、従来の戦争文学研究には欠けていたものであり、戦争文学研究に新しい知見をもたらすものとして評価された。

課題としては、タナトスや超自我といった精神分析理論の概念の導入に際して説明が不十分な部分が認められた点や、既存の体系に包摂されない事例を論じた第４・８章の埴谷雄高論に対して、同様の論点を戦争文学作品を素材に検討することができたのではないかという点などが、指摘された。また言語媒体における非言語的な領域をどのようにとらえるかという点については、より根本的な考察が必要であるという指摘もあった。それらの論点は今後、検討されるべき課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。